−酸化窒素還元酵素の電気化学制御表面増強赤外吸収分光計測

¹北大院地球環境,²北大院環境科学,³理研SPring-8 優^{1,2},中川省吾²,増田侑也²,當舎武彦³,中田耕^{1,2},八木一三^{1,2} ○加藤

Surface-enhanced Infrared Absorption Spectroscopy of Nitric Oxide Reductase under Potential Control

oMasaru Kato^{1,2}, Shogo Nakagawa², Yuya Masuda², Takehiko Tosha³, Kou Nakata^{1,2}, Ichizo Yagi^{1,2}

¹ Faculty of Environmental Earth Science, Hokkaido University, ² Graduate School of Environmental Science, Hokkaido University, ³ SPring-8 Center, RIKEN, Japan

[Abstract] Nitric oxide reductases (NORs) are a transmembrane metalloenzyme and reduce nitric oxide to nitrous oxide in the denitrification pathway of the global nitrogen cycle. The enzymatic NO reduction catalyzed by NORs occurs at the binuclear iron active site of heme b_3 and a non-heme Fe_B. The determination of reduction potentials of these iron cofactors will help us elucidate the enzymatic reaction mechanism. However, previous reports on these potentials remain controversial. Herein, we performed electrochemical and surface-enhanced infrared absorption (SEIRA) spectroscopic measurements of Pseudomonas aeruginosa NOR immobilized on gold electrodes. Cyclic voltammograms exhibited a reduction peak at -0.44 V vs. SHE, and a SEIRA spectrum of NOR-immobilized electrodes using a vibrational probe of CO showed a characteristic band at 1972 cm⁻¹ at -0.4 V vs. SHE, which was assigned to vCO of heme b_3 -CO. These results suggest that the reduction of heme b_3 initiates the enzymatic NO reduction.

【序】一酸化窒素還元酵素(NOR)は、一酸化窒素(NO) から亜酸化窒素(N2O)への還元反応を触媒する膜貫通 型金属酵素である(Fig. 1a). N₂O は CO₂の約 300 倍も の地球温暖化係数を有し,また,オゾン層破壊物質の 1 つでもあり、大気中の N₂O の約7 割が NOR によっ て生成されていると言われている[1]. そのため,環境 変動抑制などの観点で,NOR による N₂O 生成機構の 解明が望まれている.NORの触媒反応機構には,NOR が持つ4つの鉄補因子のうち heme b3 と非ヘム鉄 FeB から構成される2核鉄錯体反応サイト(Fig. 1b)が関与 しており,3つの反応機構(Fig.1c)が提案されている. 反応機構を解明するために,過去に酸化還元滴定など により heme b_3 と FeB の酸化還元電位が決定されてい るが,赤外吸収分光法のような分子構造を反映した分 光計測による決定は未だなされていない.



Fig. 1. (a) Structures of cNOR (PDB: 300R) from P. aeruginosa. (b) The arrangement of the iron cofactors in cNOR. (c) Three proposed NO reduction reaction mechanisms: cisheme b_3 , trans, and cis-Fe_B.

本研究では, cytochrome c 依存型 NOR (cNOR)を Au 電極表面に固定化し, そのタン パク質フィルム電気化学(protein film electrochemistry)により酸化還元応答および電気 化学的 NO 還元反応を調べ、そして、赤外振動プローブとして一酸化窒素(CO)を用い た cNOR 修飾 Au 電極の表面増強赤外吸収(SEIRA)分光計測により, heme b₃および Fe_B の還元電位を決定した.

【方法 (実験)】 cNOR は緑膿菌である P. aeruginosa から単離生成した[2]. 無電解メッキ法[3]により,半円筒 Si プリズム表面に Au メッキすることで cNOR 修飾用 Au 基板を作製した. cNOR は Au 基板表面に直接修飾,または,カルボキシ基を末端に有するアルカンチオールにより自己組織化単分子層を Au 表面に形成し,アミド結合形成 試薬を用いた共有結合により修飾した. SEIRA スペクトルは,Kretschmann 配置,入 射角度 70°で取得した. 電極構成は 3 電極式を採用し,作用極に NOR 修飾 Au 電極, 対極に Pt,参照極に Ag|AgCl (sat. KCl)を用いた.

【結果・考察】 cNOR の電極表面固定化前後で SEIRA ス ペクトルを測定した結果、cNOR 電極表面修飾後の電極 においてアミド I とアミド II に由来するバンドを確認 した.この結果は cNOR が電極表面に固定化されている ことを示唆している. また, cNOR 修飾 Au 電極の電気 化学的 NO 還元活性を調べるために, cNOR 修飾および 未修飾 Au 電極を用いて、Ar および NO 雰囲気下でリニ アスイープボルタモグラム(LSV)を取得したところ, cNOR 固定化電極において NO 雰囲気下で-0.4 V vs. SHE 付近に還元電流を観測した (Fig. 2). これは電極表面に 固定化された cNOR が触媒活性を保持した状態で固定化さ れている、すなわち変性していないことを示唆している. 更 に、電位制御下でAu 電極表面に固定化した cNOR に CO を 吸着させた後に、SEIRA スペクトルを取得したところ、-0.4 V vs. SHE において 1972 cm⁻¹ に特徴的なバンドを観測し (Fig. 3), 過去の報告[4]から, heme b3-CO に帰属することが できた. このことから heme b_3 が-0.4 V vs. SHE で鉄イオン が還元(Fe^{III}→Fe^{II})されることで, CO が heme b₃ に配位した と考えられる.

以上の結果を踏まえると、heme b_3 の還元が引き金となり、 cNOR による電極触媒的 NO 還元が起こることが明らかと なった. このことから heme b_3 が反応に関与していることは



Fig. 2. (a) LSVs of cNORmodified and unmodified Au electrodes recorded under Ar or NO.



Fig. 3. SEIRA spectra of CO-adsorbed cNOR under potential control.

明らかであり,過去に提案されている 3 つの反応機構のうち,heme b₃ が介在しない *cis* Fe_B 反応機構 (Fig. 1c)を否定する結果となった[5].

【参考文献】

[1] D.J. Wuebbles, Science 326, 56 (2009).

[5] M. Kato, S. Nakagawa, T. Tosha, Y. Shiro, Y. Masuda, K. Nakata, I. Yagi, submitted.

^[2] T. Hino, Y. Matsumoto, S. Nagano, H. Sugimoto, Y. Fukumori, T. Murata, S. Iwata and Y. Shiro, *Science* **330**, 1666 (2010).

^[3] M. Yaguchi, T. Uchia, K. Motobayashi and M. Osawa, J. Phys. Chem. Lett. 7, 3097 (2016).

^[4] N. Sato, S. Ishii, H. Sugimoto, T. Hino, Y. Fukumori, Y. Sako, Y. Shiro, T. Tosha, Proteins 82, 1258 (2014).

時間分解赤外分光法および凍結トラップX線結晶構造解析によるP450nor 反応中間体の解析

 ¹兵庫県立大 院生命,²理研 SPring-8,³理研 CLST, ⁴University of Liverpool, ⁵東大 院理
 ○ 野村高志¹, 當舎武彦², 杉本宏², 久野玉雄³, 山際来佳¹, ChaiGopalasingam⁴,

〕野村高志¹, 富善武彦², 杉本左², 久野玉雄[°], 山除来佳¹, Cha1Gopalasıngam¹, 山下恵太郎⁵, 平田邦生², 山本雅貴², 城宣嗣¹, 久保稔¹

Reaction Intermediate Analysis of P450nor by Using Time-resolved IR Spectroscopy and Freeze-trap X-ray Crystallography

^oTakashi Nomura¹, Takehiko Tosha², Hiroshi Sugimoto², Tamao Hisano³, Raika Yamagiwa¹, Chai Gopalasingam⁴, Keitaro Yamashita⁵, Kunio Hirata², Masaki Yamamoto², Yoshitsugu Shiro¹, Minoru Kubo¹
 ¹Graduate School of Life Science, University of Hyogo, Japan
 ²RIKEN SPring-8 center, Japan
 ³RIKEN CLST, Japan
 ⁴Institute of Integrative Biology, University of Liverpool, United Kingdom
 ⁵Department of Biological Sciences, The University of Tokyo, Japan

[Abstract] P450nor is a heme enzyme that catalyzes the reduction of NO to N₂O in the denitrification. In the catalytic reaction, NO is reduced by two electrons directly transferred from NADH. The resulting highly-activated species (intermediate-I) is the key intermediate to understand NO reduction reaction of P450nor. However, its electronic and geometric structures are not yet known. Here, we successfully characterized the coordination and protonation structures of intermediate-I of P450nor by the combinational use of freeze-trap XFEL crystallography at SACLA and time-resolved IR spectroscopy. The crystallography revealed that NO in intermediate-I is bound to the heme in a highly bent form, with a Fe-N-O angle of ca. 120°. On the other hand, the NO stretching IR signal of intermediate-I was observed at 1330 cm⁻¹, assignable to the single protonated state (Fe-NHO). On the basis of the N-O vibrational data and the Fe-N-O coordination geometry, the QM/MM calculation is underway to further elucidate the electronic structure and reactivity of intermediate-I.

【序】脱窒カビ (Fusarium oxysporum) 由来の一酸化窒 素還元酵素 P450nor は、地球上の窒素循環において、 一酸化窒素 (NO) を亜酸化窒素 (N₂O) へと還元する ヘム酵素である。P450nor の酵素反応では、(1) 酸化 型のヘム (Fe³⁺-H₂O) に NO が結合した後、(Fe³⁺-NO 型の生成) (2) NADH からのヒドリド (H⁻) 移動によ って、NO が 2 電子還元される (中間体 I の生成)。最 後に (3) 中間体 I と 2 分子目の NO が反応することで N₂O が生成し、系は酸化型に戻る (2NO+NADH+H⁺ \rightarrow N₂O + H₂O + NAD⁺) (Fig. 1)。



Fig. 1 Reaction cycle of P450nor

中間体 I は NO 活性型であり、NO 還元反応の鍵を握っている中間体である。しかし、中間体 I は不安定種であり観測が困難なため、その配位構造やプロトン化状態(Fe-

NHO or Fe-NHOH) は未だ明らかになっていない。そこで本研究では、P450norの反応 機構を解明するために、X線結晶構造解析と赤外分光法を併用し、中間体 I の配位構 造とプロトン化状態の決定を目指した。

【方法】P450norの酵素反応を駆動するために、紫外光励起により NO を放出するケ ージド NO を用いた。P450nor にケージド NO と NADH を混合し、紫外光を照射する ことで NO 還元反応を開始できる。これまでに時間分解可視吸収分光法を適用し、中 間体 I はケージド NO 光励起後、結晶相では秒、溶液相ではサブミリ秒の時間スケー ルで生成することを明らかにしている¹。そこで、X 線結晶構造解析では凍結トラッ プ法、赤外分光測定ではポンププローブ法により中間体 I を観測することにした。

X線結晶構造解析では、ケージド NO と NADH を浸潤させた微結晶をメッシュル ープに多数散布し、ケージド NO 光励起 3 秒後に微結晶を急速凍結することで中間体 Iの凍結微結晶を調製した。凍結微結晶を X線自由電子レーザー (XFEL) 施設 SACLA に持ち込み、シリアル測定によって1結晶1照射条件で無損傷構造解析した。

一方、時間分解赤外分光では、ケージド NO 光励起後の時間分解スペクトルを測定 した。スペクトルは、(1) ケージド NO 光励起前との差スペクトルを計算し、(2) その 差からケージド NO 由来のピークを差し引き、最後に(3)¹⁴NO を用いた結果と¹⁵NO を 用いた結果の差を評価することで(triple difference)、ヘムに結合した NO 伸縮振動を 検出した。

【結果・考察】中間体 I の XFEL 結晶構造解析結果を Fig. 2 に示す(分解能 1.8 Å)。Fe-N-O 角は約 120°であった。 Fe³⁺–NO 型の Fe-N-O 角は約 160°のため¹、ヒドリドによ る 2 電子還元によって、ヘムに結合した NO はヘム法線 から大きく傾くことがわかる。一方、Fe-N 結合軸は、中 間体 I では 90°に近かった。

Fig. 3 に時間分解赤外分光測定の結果を示す。赤が実測 スペクトル、黒がガウシアンでフィッティングしたスペ クトル、青と緑がその分割成分である。この時間分解ス ペクトルには、同位体シフトを示す 2 本のシグナルが含 まれていた。1 つは 1330 cm⁻¹ (Δ^{15} N=32 cm⁻¹、青)のシグ ナルで、サブミリ秒のタイムスケールで増加した。もう 1 つは 1289 cm⁻¹ (Δ^{15} N=27 cm⁻¹、緑)のシグナルで、1330 cm⁻¹の減少に伴いミリ秒で増加した。1330 cm⁻¹のシグナ ルは、NHOが結合したヘムモデル化合物の NO 伸縮振動 数²とほぼ一致する事から、Fe–NHO の NO 伸縮振動に 帰属される。一方、1289 cm⁻¹のバンドは、まだ帰属に至 っていない。

現在、1289 cm⁻¹の帰属のために重水や NADD を使った 解析を進めるとともに、得られた配位構造とプロトン化 状態を踏まえて QM/MM 電子状態解析を進めている。

【参考文献】

[1] Tosha et al., Nat Commun., 8, 1585 (2017)

[2] Abucayon, E. G. et al., Dalton Trans. ,45, 18259 (2016).



Fig. 2 X-ray structures of Fe³⁺–NO and intermediate-I



1360 1340 1320 1300 1280 1260 1240 1220 Wavenumber / cm⁻¹

Fig. 3 Time-resolved IR spectra of P450nor

1C12

エレクトロスプレー・冷却イオントラップレーザー分光法による天然 変性タンパク質αシヌクレイン部分ペプチド-低分子リガンド複合体の 構造研究

¹東工大院生命理工,²理論創薬研究所,³東工大科創院化生研 〇田端みずき^{1,3},吉森篤史²,中野洋文³,石内俊一^{1,3},藤井正明^{1,3}

Structural study on a partial peptide of intrinsically disordered protein αsynuclein - small ligands complexes by electrospray / cold ion trap laser spectroscopy

•Mizuki Tabata^{1, 3}, Atsushi Yoshimori², Hirofumi Nakano³, Shun-ichi Ishiuchi^{1, 3}, Masaaki Fujii^{1, 3}

¹ School of Life Science and Technology, Tokyo Institute of Technology, Japan ² Institute for Theoretical Medicine, Inc., Japan

³ Laboratory for Chemistry and Life Science, Institute of Innovative Research, Tokyo Institute of Technology, Japan

[Abstract]

Aggregated intrinsically disordered protein (IDP) triggers neurodegenerative disorders, thus therapeutic strategy for the disease is targeting IDPs. Recently small ligands to inhibit IDP aggregation has been found, but highly dynamic nature of IDP-small ligand complexes complicates the use of the conventional structural biological approach such as NMR and X-ray crystallography. Here we report the bottom-up approach; infrared spectroscopy combined with electrospray / cold ion trap mass spectrometry is applied to complexes of dopamine/dopamine analogues and its binding motif in α -synuclein, which is an IDP associated with Parkinson's disease.

【序】

タンパク質の機能はその固有の立体構造により説明できる、と考えるのが構造生物学

の大前提である。しかしながら、生理的条件下で固有 の立体構造を形成しないにも関わらず機能を発揮す るタンパク質が多数発見されている[1]。このような タンパク質は天然変性タンパク質(IDP)と呼ばれ、 多様な分子と結合することによって多くの生体内プ ロセスに関与している。そのため IDP は凝集しやす



Fig. 1. Formula of Ac-YEMPS-NHMe.

く、パーキンソン病など神経変性疾患の多くは原因 IDP の凝集との関連が指摘されて いる。この治療薬開発を目指し原因 IDP の凝集を阻害する低分子リガンドが発見され ているが[2]、その複合体の構造揺らぎが大きいために従来の構造生物学的手法 (NMR、 X線結晶構造解析など)を適用できず作用機序の理解につながる結合様式の解明が困 難である。そこで私たちはこの問題に対し、結合部位を切り出した部分ペプチドと低 分子リガンドとの複合体の構造をエレクトロスプレー・冷却イオントラップ法とレー ザー分光法により調べるボトムアップアプローチ[3]を適用することを着想した。本研 究では、パーキンソン病原因タンパク質であるαシヌクレインとその低分子凝集阻害 剤であるドーパミン及びドーパミン類似体に着目した。αシヌクレインのドーパミン 結合モチーフである¹²⁵YEMPS¹²⁹の両末端を保護した Ac-YEMPS-NHMe (Fig. 1、以降 YEMPS) とその低分子リガンドであるドーパミン/ドーパとの複合体の結合様式を調 べることを目的とした。

【実験方法】

ドーパミン/ドーパはアミノ基をもち、生理条件下ではプロトン化されている。そこで、 プロトン化ドーパミン/ドーパと YEMPS の複合体をエレクトロスプレーイオン法に より生成し、真空中に導入した。これを冷却イオントラップで捕捉・冷却した。ここ にH2ガスを 20% 含んだ He ガスを導入することにより、複合体の H2 クラスターを生 成した。ここに赤外レーザーを照射し、波長掃引した。赤外波長が分子の振動準位に 一致すると、H2 分子と複合体イオンに解離する。解離生成する複合体イオン(解離フ ラグメントイオン)量を飛行時間型質量分析器で検出しながら赤外レーザーを波長掃 引することで、赤外吸収スペクトルに相当する赤外光解離(IRPD) スペクトルを測定 した (Fig. 2)。過去の研究によればαシヌクレインの 125-

129 残基の結合モチーフはドーパミン/ドーパのカテコー ルの部分と結合することが示唆されている[4]。ドーパミン /ドーパのプロトン化アミノ基はペプチドと強く相互作用 することが分かっており[3]、その様な構造を排除するため に、プロトン化アミノ基を 18-crown-6-ether (CE) で包接保 護した。



Fig. 2. IRPD spectroscopy.

【結果・考察】

まず、目論見通りリガンド分子がカテコール OH 基で YEMPS と結合しているかを調べるために、 YEMPS-ドーパミン/ドーパ-CE 複合体の XH 伸縮 振動領域の IRPD スペクトルを測定した(Fig. 3a. b)。振動数から、3050~3530 cm⁻¹を NH 伸縮振動、 3530~3700 cm⁻¹を OH 伸縮振動と帰属した。OH 伸縮振動領域に着目すると、CE でアミノ基を保 護していない複合体 (Fig.3c, d) で観測される free のカテコール OH (~3650 cm⁻¹)、分子内水素結合 カテコール OH (~3580 cm⁻¹) 伸縮振動バンドが ドーパミン/ドーパ-CE 複合体両方で観測されて いない。これは、両カテコール OH 基が YEMPS と強い水素結合を形成したため、これらのバンド がレッドシフトしたためだと考えられる。この結 果から、CE でリガンドのアミン側鎖を包接保護 したことにより、目論見通り両カテコール OH 基 が YEMPS と結合している複合体を選択的に生成 できたと結論できる。先行研究では α シヌクレイ



Fig. 3. IRPD spectra of the X-H stretching region of (a) YEMPS-dopamine-CE, (b) YEMPS-dopa-CE, (c) YEMPS-dopamine, and (d) YEMPS-dopa. Vibrational region of free OH stretching vibration of catechol is shown by the dotted rectangle, while that of the (weak) intramolecular hydrogen-bonded OH vibrations of catechol is marked by the dashed rectangle.

ンのドーパミン結合モチーフはリガンド結合時に何らかの二次構造を形成している ことは示唆されているが[4]、その立体構造については未だに明確な結論が出ていない。 講演では、二次構造を反映する amide-I バンドに基づいて、YEMPS の立体構造につい て議論する。

【参考文献】

[1]P. E. Wright, et al., J. Mol. Biol. 293, 321 (1999). [2]R. Cuchillo, et al., Biochem. Soc. Trans. 40, 1004 (2012).
[3]T. Sekiguchi, et al., Angew. Chem. Int. Ed. Engl. 57, 5626 (2018). [4]F. E. Herrera, et al., PLoS One. 3, e3394 (2008).

サル緑視物質の塩化物イオン結合におけるQ114の構造的な役割

¹名工大院工,²京大霊長研 〇片山耕大¹,中村駿太¹,佐々木琢磨¹,今井啓雄²,神取秀樹¹

Structural role of Q114 for Cl⁻ binding in primate green-sensitive visual pigment

 Kota Katayama¹, Shunta Nakamura¹, Takuma Sasaki¹, Hiroo Imai², Hideki Kandori¹
 ¹ Department of Life Science and Applied Chemistry, Nagoya Institute of Technology, Japan
 ² Primate Research Institute, Kyoto University, Japan

[Abstract]

Long-wavelength-sensitive (LWS) pigments, which belong to one of four classes of vertebrate cone visual pigment, possess a chloride binding site in its protein moiety. The binding of chloride alters the absorption spectra of LWS; this is known as the chloride effect. Recently, we successfully observed chloride binding-induced structural change of monkey green (MG) pigment by ATR-FTIR spectroscopy, from which structural information of the putative chloride binding site was elicited including secondary structure of β -sheet, the hydroxyl group of Tyr, and the protonation state of carboxylate. Here, we report that Q114 plays crucial role for chloride binding. Although Q114 is located far away from the chloride binding site due to crystal structure of rhodopsin, the chloride effect is decreased by mutation at position Q114, indicating that chloride cannot bind properly in the protein moiety. Low-temperature FTIR spectroscopy also detects the loss of important structural element for chloride binding by Q114 mutation. Accompanying with protein-bound water analyses and ATR-FTIR study, our results provide insight into the role that Q114 selectively regulates the anion binding.

【序】我々が様々な色を識別できるのは、 吸収極大波長の異なる3種類の色覚視物 質が網膜に存在するからである。これら は同一の発色団分子 11-cis レチナールを もつが、タンパク質部分がレチナールの 電子状態を制御する結果、色の識別が可 能になる。それに加えて色覚視物質の中 には、塩化物イオン (Cl) が結合すると吸 収波長が長波長シフトするグループ (グ ループ L) があり、その波長シフトの分子 機構が注目されている[1]。最近我々は、 水溶液中でのスペクトル測定が可能な全 反射赤外分光法を用いて、サル緑視物質



Fig. 1. (a) Cl⁻ bound induced ATR-FTIR difference spectrum of MG. (b) Structural model of MG based on the crystal structure of bovine rhodopsin.

における CI の結合・解離に伴う構造変化を直接観測することに成功した[2]。その結 果、CI 結合によってタンパク質内部のβ-シート構造が安定化されることを見出した。 さらにレチナールやアミノ酸の一官能基の構造変化を捉え、サル緑視物質の CI 結合 部位の構造情報を得ることができた。

本発表では、新たに Q114 が CI-の結合に重要であることを発見したので報告する。

明暗を認識する (ウシ) ロドプシンの結晶構造を参考にすると、Q114 (ロドプシンの S98) は第二ヘリックスの細胞外側に位置し、CF結合部位と考えられるレチナール近 傍からは 10 Å 程度離れている。従って、Q114 がどうやって CF結合に影響をもたら すのか、構造基盤に立脚して明らかにすることで、グループ L における CF結合機構 の理解を深められると期待する。具体的には、Q114 の変異体に対する赤外分光法と 紫外可視分光法を用いた構造解析を実行し、野生型との比較を行う。

【方法 (実験・理論)】哺乳類あるいは昆虫細胞により、サル緑視物質を発現・精製し、 PC リポソームへ再構成した。CI⁻非結合型、硝酸イオン (NO₃⁻) 結合型試料を得るた め、再構成における透析時に、CI⁻の代わりに塩なしあるいは NO₃⁻存在下での緩衝液 を用いた。再構成試料 30 µL を赤外測定用窓板に滴下し乾燥フィルムを作製した後、 D₂O, D₂¹⁸O で水和、77 K での光照射前後の赤外差スペクトルを測定した。一方再構成 試料 数µL を全反射赤外分光装置のシリコンプリズムに滴下し、乾燥させた後、CI⁻ を含む緩衝液を還流させた。その後、塩あり/なしでの赤外差スペクトルを計測した。

【結果・考察】Fig. 2a は緑視物質の野生型とQ114N 変異体のCl⁻、NO₃-結合型の紫外 可視吸収スペクトルを示している。野生型のCl⁻、NO₃-結合型で30 nm 程度の波長シ フトが確認されており、過去の文献とも一致した[1]。一方でQ114N では両者におけ る波長シフト幅が小さくなり(16 nm)、Cl⁻効果が減少した。Cl⁻がレチナール近傍に結 合するのに対し、NO₃-はイオンサイズが大きいためレチナール近傍に結合できないこ とを全反射赤外分光解析により示してきたが[2]、Q114Nの結果は、Cl⁻がレチナール 近傍に結合できないことを示唆している。

Fig. 2b. c は 77 K における光 (9) 反応初期中間体バソと始状態と の赤外差スペクトルを比較した ものである。Fig. 2c において野 生型の Cl 結合型にのみ表れた 835 cm⁻¹バンドは、レチナール の C₁₄ 位の面外変角振動 (HOOP) に対応し、CI-結合の指 標バンドとして知られているが [3]、0114N では CI、NO₃いず れの結合型でもバンドが消失し た。つまり、Q114の変異により 構造的に Cl-がレチナールの C14 位近傍に結合できなくなったこ とを示している。また Fig. 2b に おける野生型の Cl-結合型で観 測される 1644. 1620 cm⁻¹バンド が、野生型のNO3話合型および



Fig. 2. (a) UV-visible spectra of the Cl⁻ or NO₃⁻ bound form of WT and Q114N measured at 293 K. (b, c) Light induced FTIR difference spectra of the Cl⁻ or NO₃⁻ bound form of WT and Q114N measured at 77 K in the 1680-1610 (b) and 950-800 (c) cm⁻¹ region.

Q114Nのいずれのイオン結合型でも消失した。これらのバンドはβ-シート構造に特徴的な amide-I バンドの振動数に対応しており、CI-結合でのみβ-シート構造が安定化されたことを示唆している。この結果は過去の全反射赤外分光の結果とも一致する[2]。本発表では、内部結合水の違いや、全反射赤外分光測定の結果も合わせ、Q114 が CI-の結合に果たす構造的な役割について議論する。

【参考文献】

Z. Wang et al. Biochemistry **32**, 2125 (1993).
 K. Katayama et al. Phys. Chem. Chem. Phys. **20**, 3381 (2018).
 T. Hirano et al. Biochemistry **40**, 1385 (2001).

脊椎動物がもつ新規光センサーOpn5L1の不活性化状態の発色団構造

¹ 阪大院理,² 岡山大院医歯薬,³ 京大院理,⁴ 立命館大,⁵ 神戸薬科大 〇水野 操¹, 水谷 泰久¹, 佐藤 恵太², 大内 淑代², 山下 高廣³, 酒井 佳寿美³, 今元 泰³, 七田 芳則^{3,4}, 山野 由美子⁵, 和田 昭盛⁵

Chromophore structure in an inactive state of a novel photosensor Opn5L1 of vertebrates

•Misao Mizuno¹, Yasuhisa Mizutani¹, Keita Sato², Hideyo Ohuchi², Takahiro Yamashita³,

Kazumi Sakai³, Yasushi Imamoto³, Yoshinori Shichda^{3,4}, Yumiko Yamano⁵, Akimori Wada⁵

¹Department of Chemistry, Graduate School of Science, Osaka University, Japan

² Department of Cytology and Histology, Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University, Japan

³ Department of Biophysics, Graduate School of Science, Kobe University, Japan

⁴ Research Organization for Science and Technology, Ritsumeikan University, Japan

⁵ Laboratory of Organic Chemistry for Life Science, Kobe Pharmaceutical University, Japan

[Abstract]

Opn5L1 is a newly identified vertebrate opsin that functions as a Gi-coupled retinal receptor. Unlike conventional opsins including visual pigments, it exclusively binds to all-*trans*-retinal to form an active state. Photoisomerization from the all-*trans* to the 11-*cis* structure deactivates the protein and is followed by formation of a covalent adduct between retinal and nearby cysteine, which provides an absorption band at 270 nm, resulting in thermal re-isomerization to the initial structure. Therefore, Opn5L1 acts as a reverse photoreceptor that loses its activity by light. In this study, we measured resonance Raman spectra of the covalent adduct of Opn5L1 to identify which position in the retinal is bound by cysteine. Based on both the measurements of spectra of isotope substitutes and quantum chemical calculations, we determined the unique structure of the retinal-cysteine adduct.

【序】

最近発見された Opn5L1 は、脊椎動物のオプシンの一種である。これまで発見され ていた視覚オプシンを含む多くのオプシンとは異なり、11-シスレチナールとは結合 せず、全トランスレチナールと結合して活性状態になるユニークさをもつ。基質であ るレチナールは、発色団としても働く。レチナール発色団は光吸収により 11-シス体 へ異性化し、Opn5L1 は不活性状態になる。その後、分子内のシステイン側鎖がレチ ナールに付加し、270 nm に吸収極大をもつ中間体(270 nm 付加体)に変化する。こ の中間体は、初期状態へ熱的に回復する。このことから、Opn5L1 は付加反応を利用

し、11-シス体から全トランス体へ熱的に変 化することが示唆されている(Fig. 1)[1]。 本研究では、この付加反応を含む Opn5L1の 反応機構を明らかにするため、鍵となる 270 nm 付加体の共鳴ラマンスペクトルを観測し た。同位体置換体のラマンスペクトル観測お よび量子化学計算に基づき、270 nm 付加体 の構造を決定した。



【結果と考察】

ニワトリ由来 Opn5L1 は界面活性剤により可溶化し た試料をもちいた。これに対して、可視光(>500 nm) を照射し 270 nm 付加体を生成した。光反応による発色 団の吸収変化は、レチナールにシステイン残基が付加 し、ポリエン鎖の共役系が切断されることに起因する と考えられている。励起光 238 nm で観測した 270 nm 付加体における発色団の共鳴ラマンスペクトルを Fig. 2Aに示す。スペクトルには、発色団に由来するバンド の他に、タンパク質中にあるトリプトファン・チロシ ン、およびタンパク質の発現にもちいた細胞の脂質に 由来するバンドが強く現れた。野生型 Opn5L1 と付加 体を形成しないC188T変異体のスペクトルを比較する と、1640 cm⁻¹付近の散乱光強度が異なっていた。アミ ノ酸置換したタンパク質が野生型と大きく構造が変わ らないと仮定すると、観測されたスペクトル形状の違 いは、270 nm 付加体の発色団の C=C 伸縮振動バンド と考えられる。そこで、野生型のスペクトルから、脂 質および C188T 変異体のスペクトルを差し引き、270 nm 付加体の発色団のバンドを得た結果、1640 cm⁻¹付 近に2本のバンドを観測した (Fig. 2B)。これらのバン ドの帰属を行うために、ポリエン鎖の炭素原子を同位 体置換した試料のスペクトルを観測した (Fig. 2C)。9 および 10 位の置換体のスペクトルでは低波数側のバ ンドが、13位の置換体では高波数側のバンドが同位体 シフトを示したのに対し、12位の置換体では明確なシ フトを示さなかった。これらの結果は、低波数側のバ ンドはイオノン環側の C=C 伸縮振動モードに、高波数 側のバンドはシッフ塩基側の C=C 伸縮振動モードに 帰属されること、12位の炭素は2重結合を形成してい ないことを示しており、これまでに提案されている 11 位の炭素原子へのシステイン付加を強く支持した。



Fig. 2 (A) Resonance Raman spectra of Opn5L1 excited at 238 nm. Red and black traces are Raman spectra of the wild type and the C188T mutant. Green, blue and gray broken traces indicate Raman spectra of tryptophan, tyrosine and lipid, respectively. (B) Difference spectrum obtained by subtracting the spectrum of the C188T mutant from that of the wild type, representing the Raman spectrum of the 270-nm product of Opn5L1. (C) Raman spectra of the isotope substitutes of the 270-nm product of Opn5L1. Intensities of the spectra in panels B and C were multiplied by 4.

さらに、270 nm 付加体の発色団モデルについて DFT 法(B3LYP/6-311G**)による 量子化学計算を行った。シッフ塩基がプロトン化している条件では、C₁₃=C₁₄ 伸縮振 動の振動数が著しく低く実験結果を再現しなかったのに対して、シッフ塩基が脱プロ トン化した条件では、C₁₃=C₁₄ 伸縮振動の振動数がもっとも高波数側に現れることが わかり、実験結果をよく再現した。また、発色団モデル化合物である 11,12-ジヒドロ レチナールシッフ塩基のラマンスペクトルにおいても、13 位の炭素原子を同位体置換 した試料では、脱プロトン化状態でタンパク質と類似の同位体効果が観測された。こ れらの結果から、Opn5L1 のレチナール発色団は、270 nm 付加体において、11 位の炭 素原子にシステインが付加し、シッフ塩基が脱プロトン化している構造をとっている ことを結論した。

【参考文献】[1] K. Sato, T. Yamashita, H. Ohuchi, A. Takeuchi, H. Gotoh, K. Ono, M. Mizuno, Y. Mizutani, S. Tomonari, K. Sakai, Y. Imamoto, A. Wada, Y. Shichida, *Nature Commun.* 9, 1255 (2018).

青色光受容タンパク質PYPと下流分子PBPによる 複合体形成ダイナミクスの検出

¹京大院理,²学習院大理,³奈良先端大物質 〇金穂香¹,中曽根祐介¹,高門輝²,山崎洋一³,上久保裕生³,寺嶋正秀¹

Complex formation dynamics of blue light sensor protein PYP and its downstream protein PBP

 Suhyang Kim¹, Yusuke Nakasone¹, Akira Takakado², Yoichi Yamazaki³, Hironari Kamikubo³, Masahide Terazima¹
 ¹ Department of Chemistry, Kyoto University, Japan

² Department of Chemistry, Gakushuin University, Japan

³ Graduate School of Materials Science, Nara Institute of Science and Technology, Japan

(Abstract) PYP is a bacterial blue light sensor protein regulating a negative phototactic response. It contains *p*-coumaric acid as a chromophore[1]. Upon photoexcitation, PYP undergoes a photocyclic reaction that begins with a *trans-cis* isomerization of the chromophore. Though the photochemistry of the chromophore has been studied extensively, the signal transduction mechanism is still under debate to a lack of information on downstream proteins. Recently, however, a partner protein which is called PYP binding protein (PBP) was identified for PYP from *Rhodobacter capsulatus*[2]. In this study, to understand the signaling mechanism, we investigated the reaction dynamics of the complex formation between PYP and PBP using the transient grating (TG) method. In the presence of PBP, a significant decrease of the diffusion coefficient of PYP was observed, representing a formation of the PYP-PBP complex. Analyzing a time development of the diffusion signal, we firstly determined the rate constants of several steps of the complex formation.

【序】PYP は紅色細菌の負の走行性に関わる青色光受容タンパク質である。発色団である *p*-クマル酸のトランスーシス異性化を起点として、プロトン移動や構造変化を伴う光反応サイクルを示す[1]。 PYP はタンパク質間相互作用を媒介する PAS ドメインの一種であり、そのシグナル伝達機構が注目されているが、直接相互作用する下流分子が同定されていなかったため、信号伝達機構について未知な



Fig. 1 Model of complex formation

点が多い。しかし近年、紅色細菌 *Rhodobacter capsulatus* において PYP の下流分子 PBP が同定された[2]。溶液中でダイマー構造をとる PBP は PYP と光依存的に相互作用し、 Fig. 1 に示すように多段階に複合体を形成することが小角 X 線散乱測定により予想されている[2] (Fig. 1)。本研究では、分子間の信号伝達機構を速度論的に明らかにするために、拡散係数変化という観点から複合体形成反応を時間分解で検出可能である過渡回折格子法 (TG 法)を用いて PYP と PBP による複合体形成ダイナミクスを検出することを目的とした。 【方法】TG 測定では、励起光として 462 nm のパルスレーザーを、プローブ光として 840 nm の CW レーザーを用いた。複合体形成を PYP の反応から分離するために、PYP のみの試料および PYP と PBP を混合した試料について測定した。

【結果・考察】PYP 単独の試料と PBP を加 えた試料の TG 信号を測定し、分子拡散信号 を比較したところ (Fig. 2(a))、PBP 共存下で のみ強い山型の信号が観測された。これは 光励起によって拡散係数が顕著に変化した ことを示しており、複合体形成による分子 サイズの変化に帰属できる。

Fig. 2(b)に TG 信号の格子波数依存性を示 す。拡散信号の時間発展は、観測している時 間スケール(ミリ秒以降)で拡散係数変化 (複合体形成) が起こっていることを示し ている。2段階で拡散係数が変化するモデル を用いると信号をよく再現できた。早い反 応の速度定数は PBP 濃度に線形に依存した ことから PYP と PBP ダイマーの会合反応で あると帰属した(複合体 I の形成)。拡散係 数の値は PYP 単体では 1.1×10⁻¹⁰ m²/s、複合 体 I では 4.2×10⁻¹¹ m²/s であり、会合反応の 速度定数は 4.5×10⁵ M⁻¹s⁻¹ であることがわ かった。この拡散係数の変化量は分子サイ ズの変化から予想されるよりも大きい。CD 測定により光照射前後で顕著な二次構造変 化が見られたため、これが要因で拡散係数 が大きく減少したと考えられる。

興味深いことに、早い反応の速度は励起光 強度に依存しない一方、遅い反応の速度定数 は励起光強度を上げるとともに増加した。こ



Fig. 2 (a) TG signals of PYP in the absence and presence of PBP. (b) Time development of the molecular diffusion signal of PYP with PBP. The dotted lines are fitting curves.

の結果は遅い反応が励起分子同士の会合反応であることを示しており、複合体Ⅱの形成過程と同定した。解析の結果、複合体Ⅱの拡散係数は 3.5×10⁻¹¹ m²/s、励起光強度 210 μJ の条件において速度定数は 2.1 s⁻¹と求まった。拡散係数の変化量が複合体 Ⅱの 形成反応として妥当であったことも上記解釈を支持している。Fig. 3 に本研究により 明らかになった反応スキームを示す。本討論会では、上記結果を基に PYP と PBP による複合体形成ダイナミクスの詳細について発表する。



【参考文献】

- [1] Van Aalten, D. M. F et al., Protein Sci. 2000, 9, 64.
- [2] Yamazaki et al., private communication.

青色光センサータンパク質PixDの分子機能におけるC末端領域の重要性 京大院理 〇床次俊郎,中曽根祐介,寺嶋正秀

The importance of C-terminal region on the molecular function of blue light sensor protein PixD

•Shunrou Tokonami, Yusuke Nakasone, Masahide Terazima Department of Chemistry, Kyoto University, Japan

[Abstract] Bacterial blue light sensor BLUF proteins, SyPixD and TePixD, have highly similar decamer structures in crystal. However, they show distinct photoreaction. SyPixD dissociates into the dimer under high fluence of light irradiation, while TePixD dissociates into the pentamer under weak light condition. In order to understand the molecular mechanism underlying the difference, we focus on the C-terminal region of the BLUF domain. Since this region is considered to be important for signal transduction and shows no similarity in amino acid sequence among various BLUF proteins, it might be a key factor determining the diversity of the reaction. We investigated the photoreaction dynamics of several C-terminal region indeed affects the oligomeric state and light response at the molecular level.

【序】PixD は、発色団にフラビン色素を 有する青色光センサーBLUF(sensor of Blue Light Using Flavin)タンパク質ファミ リーの1 つで、生体内ではシアノバクテ リアが持つ、走光性におけるシグナル伝 達初期過程の制御を担っている。PixD に は, Synechocystis 由来の SyPixD と *Thermosynechococcus* <u>e</u>longatus 由来の TePixD の2 種が知られており、共に非常 に類似した 10 量体構造を有している (Fig.1 左上)。しかし、面白いことに SyPixD と TePixD は全く異なる光反応ダ イナミクスを示す(Fig.1下)。SyPixD は強 青色光で励起されると、まずフラビン由 来の吸収スペクトルがレッドシフトした 状態に至り(BLUF タンパク質共通の反 応)、その後10量体が2量体へ解離する[1]。 一方 TePixD は, 弱青色光でレッドシフト 状態に至り、10量体から5量体に解離す る[2]。2 つのアミノ酸配列を比較すると、





フラビンを保持する光センサードメインには相同性があるが、C 末端領域には相同性

がないため、2つの違いはC末端領域に起因する可能性がある。特にSyPixDはTePixDよりもC末端の先端領域が7残基だけ短い(Fig1.右上)。そこで本研究では、SyPixDのC末端を7残基除去した変異体(SyC7d)を作製し、PixDの光誘起解離反応にC末端領域が及ぼす影響を調べた。光反応の検出には、反応前後の分子の拡散係数変化を検出できる分光手法、過渡回折格子(TG)法を用いた。

【実験】PixD の野生型や変異体のサンプルは、大腸菌を用いた発現系により大量発現 し、HisTrap 精製を行った。TG 測定では、462 nm の色素レーザーを励起パルス光に、830 nm の CW ダイオードレーザーをプローブ光に用い、サンプルから出た回折光を赤外 光用 PMT で検出した。

【結果・考察】Figure2 に SyPixD の WT と C7d 変異体それぞれの暗状態と光状態の吸 収スペクトルを示した。変異体でも WT 同様のレッドシフトが起こっていることから, 変異後も発色団周辺の環境が保たれてい ることを確認した。

Figure3 に SyPixD の WT と C7d 変異体の TG 信号を示した。山型の信号は、光反応に よって分子に拡散係数変化が生じたこと を示す信号であり、先行研究から、WT で は10量体から2量体への解離を表してい ることが分かっている[1]。一方, C7d 変異 体では信号が大きく変化した。すなわち, 分子拡散信号が速い時間領域へとシフト しており、これは反応物の拡散係数が WT よりも大きく、より小さな会合状態を形成 していることを示唆している。詳細に解析 を行ったところ、C7d では光反応物と生成 物の拡散係数が、それぞれ D_R=7.2×10⁻¹¹ m^2/s , $D_P=8.7 \times 10^{-11} m^2/s$ であった。WT の光 生成物の 2 量体の拡散係数 Dp=7.5×10⁻¹¹ m²/s と非常に良い一致を示すことから. C7d では2量体の構造変化が光誘起されて いることが示唆された。また、サイズ排除 クロマトグラフィや Native-PAGE でも、分 子量から2量体であることを確認した。

さらに、7残基だけではなく、5、3、1残基 を除去した変異体でも2量体を支持する結 果が得られており、C末端を1残基でも除



Fig. 2. Absorption spectra under dark and light condition of WT and C7d mutant



(normalized at peak intensity)

去すると、PixDの特異な10量体構造形成に影響があることが明らかになった。

これまでの研究から、SyPixD は 10 量体構造を持つことで初めて、下流分子 SyPixE と相互作用が可能になり、走光性のシグナル伝達が発現すると考えられている。本結果は、一見不必要な、光センサードメインから離れた C 末端領域の先端部位が、PixD の 10 量体構造の維持に必要な要素であり、分子機能発現のためには欠くことができない要素であることを示唆している。現在、C 末端に置換、付加を施した変異体の測定も行っており、講演ではそれらの結果も踏まえ、PixD の分子機能に関わる C 末端の役割を議論する。

【参考文献】[1] K. Tanaka *et al.*, *J. Mol. Biol.*, 409, pp.773-785 (**2011**). [2] K. Tanaka *et al.*, *J. Mol. Biol.*, 386, pp.1290-1300 (**2009**).

Unraveling the excited-state structural dynamics of LSSmOrange protein through time-resolved impulsive stimulated Raman spectroscopy

 Pardeep Kumar^{1,2}, David Manuel Rantasa³, Eduard Fron⁴, Haruko Hosoi⁵, Hikaru Kuramochi^{1,2,6}, Satoshi Takeuchi^{1,2}, Hideaki Mizuno³, Tahei Tahara^{1,2}
 ¹ Molecular Spectroscopy Laboratory, RIKEN, Japan
 ² RIKEN Center for Advanced Photonics (RAP), RIKEN, Japan
 ³Laboratory of Biomolecular Network Dynamics, Biochemistry, Molecular and Structural Biology Section, Department of Chemistry, KU Leuven, Belgium
 ⁴Laboratory of Molecular Imaging and Photonics, Department of Chemistry, KU Leuven, Belgium
 ⁵Department of Biomolecular Science, Faculty of Science, Toho University, Japan

[Abstract] LSSmOrange is a mutant of a coral fluorescent protein, DsRed. The absorption and emission maxima of LSSmOrange are separated by 5453 cm⁻¹, and this large energy difference has provided the capability of multicolor imaging with a single excitation laser line in living cells. The chromophore of LSSmOrange has a neutral form in the ground state. Upon photoexcitation, it undergoes ultrafast excited-state proton transfer (ESPT), resulting in the formation of the bright anionic state. This ESPT dynamics of the LSSmOrange is represented by the multi-exponential kinetics, however, its mechanism has not been fully understood yet. To clarify the ESPT mechanism from a structural viewpoint, we employed time-resolved impulsive stimulated Raman spectroscopy (TR-ISRS) using sub-10 fs pulses, and recorded the Raman spectra of the chromophore with femtosecond time resolution. The obtained time-resolved Raman data indicate that the chromophore in LSSmOrange is present in two different structural forms and thus explain the observed multi-exponential kinetics of the ESPT.

[Introduction] Studying biological processes in the living cells is a challenging task, however,



Fig. 1. (A) Chromophore structure with interactions with the nearest amino acids in LSSmOrange based on the crystallographic structure (PDB ID: 4Q7R). Blue and orange traces are the steady state absorption and fluorescence spectra of LSSmOrange (pH 7.4, 20 mM Tris-HCl buffer + 150 mM NaCl). (B) Measurement scheme and pulse sequence of TR-ISRS. Blue and orange traces denote a pump-probe signal measured with P1 and P3 pulses, and a TR-ISRS signal measured with P1, P2 and P3 pulses, respectively. Green trace is the time-domain Raman signal, which is extracted from the TR-ISRS signal by subtracting the slowly-varying population component.

fluorescent proteins have provided the capability of observing these biological processes under the physiological conditions. LSSmOrange is a fluorescent protein developed to fill the spectral gap between green-yellow and red fluorescent proteins. The absorption and emission maxima of LSSmOrange is separated with very large energy (Figure 1A). This large energy separation is rationalized with the mechanism of ultrafast excited-state proton transfer (ESPT)¹. The initial photo-excited chromophore has a neutral form (Figure 1A), and it undergoes the ultrafast ESPT, resulting in the formation of the bright anionic state. However, the excited-state dynamics of LSSmOrange have not been clearly understood yet. To clarify the excited-state dynamics from a structural viewpoint, we employed time-resolved impulsive stimulated Raman spectroscopy (TR-ISRS)² using sub-10 fs pulses, and recorded the Raman spectra of the chromophore with femtosecond time resolution.

[Methods] Measurement scheme and pulse sequence of TR-ISRS are shown in Figure 1B.

The actinic pump pulse (P1, 415 nm, 90 fs) was generated by frequency-doubling the output of the Ti:Sapphire amplifier. The Raman pump and probe pulses (P2 and P3, 600-800 nm) were generated using a non-collinear optical parametric amplifier (NOPA). The output of the NOPA was compressed to < 8 fs using a folded prism and micro-machined membrane pair deformable mirror, and the obtained pulse by self-diffraction was characterized frequency-resolved optical gating (SD-FROG) at the sample position. These three pulses (P1, P2, and P3) were focused together onto a 0.3-mm thick flow cell.

[**Results and Discussion**] Time-resolved Raman spectra of LSSmOrange, obtained by TR-ISRS, are shown in Figure 2. Immediately after photoexcitation (for example, $\Delta T = 0$), weak Raman bands of the neutral form before the ESPT were observed. Subsequently, on the femto-to-picosecond time scale, we



Fig. 2. Time-resolved Raman spectra of LSSmOrange (pH 7.4, 20 mM Tris-HCl buffer + 150 mM NaCl) at various P1-P2 delays (Δ T). Raman spectrum at 0 ps is 10 times magnified (dotted curve).

observed the growth of numbers of Raman bands, which is attributable to the formation of the anionic form chromophore through the ESPT. The kinetic analysis of these anionic form Raman bands reveals bi-exponential growth of its population. The analysis also indicates that this bi-exponential feature is associated with two parallel ESPT pathways producing two different anionic form species with different Raman spectra, suggesting the heterogeneity of the chromophore structure of LSSmOrange. On the basis of the previous X-ray crystallographic study of LSSmOrange³, we attribute the origin of this heterogeneity to the different hydrogen bond environments around the chromophore.

[References]

- [1] E. Fron et al. J. Phys. Chem. B, 119, 14880 (2015).
- [2] H. Kuramochi et al. Rev. Sci. Instrum., 87, 043107 (2016).
- [3] S. Pletnev et al. PLOS ONE, 9, e99136 (2014).

ピコ秒時間分解けい光分光法による 人工脂質二重膜と細胞膜の粘度分布の比較

¹学習院大理,²京大院薬 〇林春菜¹,木村光男¹,高田直人²,高門輝¹,申惠媛²,岩田耕一¹

Comparison of Viscosity Distribution Between Artificial Membranes and The Plasma Membrane with Picosecond Time-resolved Fluorescence Spectroscopy

 OHaruna Hayashi¹, Mitsuo Kimura¹, Naoto Takada², Akira Takakado¹, Hye-Won Shin², Koichi Iwata¹
 ¹ Faculty of Science, Gakushuin University, Japan
 ² Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Kyoto University, Japan

[Abstract] The raft structure presumed in the plasma membrane is often compared with the static raft structure artificially formed in phase separated lipid bilayers. We tried to characterize the structure and possible fluctuation of lipid bilayer membranes by estimating their viscosity. We evaluated the membrane viscosity by using *trans*-stilbene as a fluorescence probe, with picosecond time-resolved fluorescence spectroscopy. In this study, we attempted to estimate the viscosity of artificial lipid bilayers in phase separated liposomes and the plasma membrane of HeLa cells by using 4-hydroxy-*trans*-stilbene as a fluorescent probe. The result indicates that both of the phase separated membranes and the plasma membrane have at least two environments with different viscosity. The presence of the lipid raft is strongly suggested in the plasma membrane. The difference in viscosity between the two environments of the plasma membrane is larger than that of the phase separated artificial liposome, suggesting the presence of more complicated raft structure in the plasma membrane.

【序】近年広く支持されている細胞膜の構造モデルとして、脂質二重膜の中に「ラフト」と呼ばれるミクロドメインが存在するラフトモデルが挙げられる。ラフトは動的な構造ゆえに可視化が困難で、構造やサイズなども明らかとなっていない。このラフトを模したものが相分離系の脂質二重膜であり、細胞膜のモデルとして多くの研究に用いられている。しかし、静的な「人工ラフト」と動的な「ラフト」のあいだでは、その動的挙動の違いゆえに物性やミクロ構造に乖離があると考えられる。そこでわれわれは、構造に依存して変化する物性のひとつである粘度に着目した。われわれはこれまで、脂質二重膜中に封入した trans-スチルベン (tSB)の異性化速度をピコ秒時間分解けい光分光法によるけい光減衰過程の測定から算出し、粘度を見積もることに成功している [1,2]。本研究では、三成分系の相分離脂質二重膜と細胞膜に4-ヒドロキシ trans スチルベン (tSB-OH)をプローブ分子として封入し、局所粘度を評価することによって、人工ラフトとラフトの構造の比較を試みた。

【方法 (実験・理論)】

DOPC:DPPC:コレステロール (Chol) (モル比 1:1:1) から成るリポソームおよび HeLa 細胞の細胞膜に封入した tSB-OH のけい光寿命を、ピコ秒時間分解けい光分光計により測定した。再生増幅された Ti:Sapphire レーザーの出力を OPA を経て時間幅 40 fs、波長 320 nm のパルス光に変換し、この光を励起光として試料に照射した。得られたけい 光を分光器に導入後、ストリークカメラによって時間分解検出し、波長 360 nm から

420 nm のけい光減衰曲線を解析に用いた。試料部では、リポソームは 1 cm 角セルに入れて温度制御し、HeLa 細胞は培養フラスコのまま室温で保持した。

【結果・考察】

最初に*t*SB-OH でもけい光寿命から見積もられた光異性化速度定数が、アルカン溶 媒の粘度と相関をもって変化することを確認した。*t*SB と同様に、*t*SB-OH の光異性化 反応も線時計として利用できる。次に、リポソーム中の*t*SB-OH のけい光減衰曲線を 観測した。得られた減衰過程は二重指数関数で近似できた(Fig. 1.(a))。この人工脂質 二重膜は、コレステロールに富む DPPC 相とコレステロールに乏しい DOPC 相に相分 離することが知られている[3]。DOPC リポソームおよび DPPC:Chol (7:3) リポソー ム中の*t*SB-OH の減衰曲線と比較することで、DOPC:DPPC:Chol リポソームの2 種類 の減衰過程には、形成した各相の異なる粘度が反映されていることが明らかとなった。 また、*t*SB-OH を封入した HeLa 細胞と *t*SB-OH を含まない HeLa 細胞のけい光差スペ クトルから、細胞膜中に封入された *t*SB-OH の時間分解けい光スペクトルを得ること に成功した。得られた *t*SB-OH のけい光減衰曲線(Fig. 1.(b))は、二重指数関数で再 現できた。このことは、相状態の異なるドメイン構造の存在を示唆する。人工の相分 離脂質二重膜においてラフトの存在と矛盾しない結果が得られた。

けい光寿命から見積もった粘度を Table 1 に示す。HeLa 細胞の細胞膜の粘度は人工 脂質二重膜と比較して約 10 倍小さい。不飽和脂質の割合が高い細胞膜では流動性が 大きいと考えられる。また、膜内に存在する 2 種類の領域の粘度の差が、人工脂質二 重膜では 30 倍であったのに対し細胞膜では 100 倍であった一方で、振幅比には大き な差は見られなかった。マクロな観点でドメインの存在比を比較すると人工ラフトは 細胞膜に近い良いモデルであるが、複雑な構造が反映されうる各ドメインの粘度には 大きな違いが見られることが明らかとなった。



Fig. 1. Fluorescence decay curves of *t*SB-OH embedded in the lipid bilayers of DOPC:DPPC:Chol liposomes (red trace) and the plasma membrane of HeLa cells (blue trace). Each decay kinetics is fitted with a double exponential function.

Table 1. Viscosity (η) of the lipid bilayer and the plasma membranes estimated from fluorescence lifetime of *t*SB-OH.

Sample	η (fluid) / mPa s	η (viscous) / mPa s	Amplitude ratio
DOPC:DPPC:Chol.	10	300	0.72
HeLa cell	0.5	45	0.69

【参考文献】

[1] Y. Nojima and K. Iwata, J. Phys. Chem. B 118, 8631 (2014).

[2] 林, Manjusha, 高田, 高屋, 中村, 申, 岩田, 第12回分子科学討論会, 1D20 (2017). [3] G. W. Feigenson, *BBA* **1788**, 47 (2009).

金属錯体脂質と金属イオン集積による脂質膜ドメイン構造体の創出

¹熊本大院先端,²九大院理 〇大谷亮¹,木下祥尚²,松森信明²,速水真也¹

Construction of lateral domains incorporating metal complex lipids and metal ions in lipid bilayers

Ryo Ohtani¹, Masanao Kinoshita², Nobuaki Matsumori², Shinya Hayami¹
 ¹ Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, Japan
 ² Department of Chemistry, Kyushu University, Japan

[Abstract] The artificial lateral domain architectures in lipid bilayers were constructed by coordination networks incorporating metal complex lipid $[Mn(N)(CN)_4][dabco-C_{16}H_{33}]_2$ (1) and metal ions. The resultant domains on giant-unilamellar vesicles (GUVs) show dynamic formation/deformation behavior responding temperature changes. It is noteworthy that angular domains are formed not circles in lipid membranes, indicating a crystallization of domain components via metal accumulations.

【序】

生体膜では、様々な脂質種間の異なる 分子間相互作用を反映した流動性の異 なる領域"ラフトドメイン"が存在し、 高度な生体機能を担っている。このよう な膜機能を理解し制御するためには、人 工的な脂質間相互作用の制御による膜 ドメインシステム構築が不可欠である。 我々のグループでは、脂質膜内で制御可 能な分子間相互作用として"配位結合" に着目し、脂質膜内での金属錯体構築に よるドメイン化を目指し研究展開して きた^[1,2]。

本研究では、金属錯体脂質 [Mn(N)(CN)4][dabco-C₁₆H₃₃]₂ (1) と DMPC から multilamellar vesicles (MLVs) および giant-unilamellar vesicles (GUVs) を調整し、DSC や共焦点蛍光顕 微鏡観察などから金属イオン添加によ る脂質膜の相分離挙動について検討し た(図1)。1 は、金属イオン添加によ



図1.1の構造とドメイン構築の流れ

りシアノ架橋型のネットワーク構造体を構築可能な機能性錯体脂質である。1 を含む 脂質膜において、金属イオン添加前後での熱挙動について詳細に検討することで、脂 質膜内で動的な錯体ドメインが得られていることが分かった。

【方法 (実験・理論)】

DMPC と錯体脂質 1 を mol 比 1:0.18 で混合することで MLVs を作成し、DSC、 WAXD 測定から、金属イオン添加による相分離挙動について検討した。また、同様 の混合比で、electroformation 法により GUVs を作成し、温度制御下での共焦点蛍光 顕微鏡観察により、形成される錯体ドメインの形態や動的挙動について明らかにした。

【結果・考察】

DSC および WAXD の結果から、作成した DMPC/1(0.18) は 298 K でゲル相から液晶相への主転移を示した。これに MnSO4 を滴下すると、DSC 測定から、より高温側の 303 K 付近までの新たなピークが生じることが分かった(図2)。これは、1 と MnSO4 間での配位結合により金属錯体ドメインが構築されることで、高温まで安定なゲル相が生じ、膜の相分離が起こっていることを示している。そこで、得られたドメインの形態や動的挙動について明らかにするために、同組成の GUVs を作成し、301 K から 312 K までの温度領域における共焦点蛍光顕微鏡観察を行った。



図2. DSC の結果

予想に反して、302 K (29 °C) 付近では相分離が観測されなかったが、306 K (33 °C) 付近までの昇温により徐々に数µm 程度のドメインが形成することが分かった。これ は、302 K では視認できない程度の非常に小さい錯体ドメインがゲル相として形成し、 温度上昇に伴ってそれらが集まることで大きなドメインへと成長したことを示して いる。更に、昇温することで、形成した錯体ドメインがゲル相から流動相に相転移し 全体が均一な流動相に変化した(図3)。この挙動は、降温過程においても示され可 逆的であることが分かった。興味深いことに、形成したドメインは円形ではなく角張 った形状であり、金属イオン集積による結晶化が示唆された。本成果は、人工ドメイ ンシステム構築のために配位結合が有用であることを示しており、金属イオン種によ りドメインサイズ、安定性など機能制御が可能であると期待される。



図2. 共焦点蛍光顕微鏡観察結果とドメインの動的挙動

【参考文献】

[1] R. Ohtani et al. Chem. Commun. 53, 13249 (2017).

[2] R. Ohtani et al. Angew. Chem. Int. Ed. 54, 1139 (2015).